

昨年、私の学校では、一年生が二組あって、一組は私が、二組は菊池先生という先生が指導しました。菊池先生は、今まで私のような指導をした経験は勿論ありません。昨年初めて私と一緒にこの指導を始めたものです。ですから、つい今までの一年生に対するやり方が出て、漢字で書くべき所をかなで書いてしまうことがあるのです。すると、そういう時に限って、きまって、「先生、これは何ていうことなの」という質問が多いのだそうです。それで先生は、はっと気が付いて、漢字に書き改めると、「庖あんだ、××か」と言ってすぐ了解してしまうので、「今まで半信半疑だったが、かなより漢字の方が、一年生にとってもわかりやすいのだな」ということがわかった、という話でした。

私たち、言葉については相当熟達しているつもりの者でも、かな文が読みにくく、読んでみて首をかしげ、何回か読み返してみるのは、日本語の宿命です。「慣れ」だけの問題では決してありません。それはまだ「慣れ」のでき上っていない一年生でさえこうなのですから。

菊池先生には、もう一つ傾聴すべき経験談があります。それは、一年生も終りに近づいたある日、普通の一年生が読んでいる教科書を読ませたところ、今までの漢字の多い文を読む時とは打って違って、これはしどろもどろの拾い読みをするのだそうです。そこで、このかな書き文を全員に読ませ、その上で、「今まで読んで来たような文と、今読んだかなばかりの文と、どちらが読みやすい？」と尋ねてみたそう

です。すると、「漢字の多い文の方が読みにくい」と答えた子供は三人しかいなかったそうです。この組には、その二、三か月前に他校から転入して来たばかりの子供もいましたが、その子まで「漢字の多い文の方が読みやすい」と答えたそうです。

なお、この時、その理由も質問したそうですが、「漢字の多い文の読みにくい」わけは、「かなはどんな字でも読めるが、漢字には読めない字があるからだ」と答えたそうです。この三人は、中くらいの能力の子供だそうですが、かな文字論者の考え方は、ちょうどこの子供たちの考えと同じ程度にあるように思われます。なるほど、かななら発音できない文字はないわけで、「読む」とは、意味に関係なく、声に出して言うこととしか考えていない者だけが考えることです。私たちは、一年生でも、ほとんどの子供が、「漢字の方が読みやすい」と考えており、その理由は、「**かなは読んでも**、何だか意味がわからないことがあるのに、漢字だとよくわかるから」「漢字は一目で読めるから」という答をしていた、という事実を知らなければなりません。つまり、漢字で表記すべき言葉は、最初から漢字で表記して指導するなら、学習が困難であるどころか、その方がずっとやさしいのです。それは実験の結果が示すだけでなく、子供の純粋な感想がそれを表明しているのです。子供がこのように考えているのですから、幼稚な文字を与えて、子供たちの思考力の成長をさまたげるようなことをせずに、安心して漢字

を与えるべきだと思います。

カナモジ会の理事長松坂忠則氏は、「漢字もカナも、同じようにゲシュタルトとしてつかむものであるから『ガッコウ』という表記も、**慣れれば**『学校』と同じ効果を発揮する」と、その可能性を主張しています。しかし、世の常の人々は、この「**慣れれば**」という意味を深く考えないで、かなを学べば、それだけですぐ役に立つものと早合点してしまうのです。「慣れれば」ということは、裏を返せば、「かなを学んだだけでは役に立たない」ということなのです。宣伝文につられて、つい新しい物を買って、こんなはずではなかったが、と後悔するのは、宣伝文が悪いのではなくて、それに簡単に乗せられる人が軽率なのです。でも商品は、悪かったら、買っても使わなければそれで済みますが、文字の場合は、取り返しがつかなくなったりしますから、ただ軽率だったと後悔するだけでは済まないのです。

では「慣れる」という意味について考えてみましょう。「ガッコウ」とか「ガッソウ(合奏)」とか、いろいろの言梨について、その文字構成の全体から来る印象を、一つ一つ頭の中に、それらの持つ意義、内容と共に、これを結合させ記憶にとどめなければならないのです。漢字の場合のように、「構造的」「論理的」な学習ができませんから、「ガッコウ」や「ガッソウ」が、それぞれ固有の印象を持つためには、これらが、よほど反復して現出され、練習されなければなりません。つまり、漢字

以上の練習を必要とすることになるのです。ですから、国語の表記をかな文字に改めたからと言って、国語の学習が軽減されると考えたら、とんでもない見当違いで、かえって今以上の強力な練習を必要とすることになるでしょう。

論より証拠です。文字数26の欧米諸国を見ればよくわかります。それには幸いアメリカンスクールが国内にいくつもありますから、訪問して下さい。低学年では一日平均120分の国語学習をしていることがわかります。今まで、私たちが、一日45分の国語学習しかしていなかったのに比べると、その二倍半にも当る時間です。それでも、アメリカ人の読書能力が日本人のそれを上回るものでは決してなかったのです(フランスの一年生は、一週15時間の国語の学習を五日でやりますから、一日、3時間の国語学習があることになります。つまり毎日180分ですから、45分の四倍になります)。文字数が少なければ、学習の負担が軽くなるどころか、少ない文字で機能を高めるためには、逆に、多くの練習を必要とするので、負担が重くなるのです。これは、文字の本質から考えてみれば、容易にわかることですが、このように考えなければ、ローマ字26字の欧米諸国が、教育漢字だけでもその30倍以上も文字がある日本人よりも、多くの時間を国語学習に費している理由が理解できないでしょう。